

「恵南豪雨災害を体験して」 元上矢作町役場勤務 Hさん 男性

人的被害が奇跡的に少なかった理由のひとつに、上矢作町消防団の活躍があります。出水のピークが午前2時頃から5時頃のまだ暗い時であったため、川の増水状況がわからず、町長が全町民に同報無線や有線を通じて避難勧告を出しましたが、特に一人暮らし老人等には届いていない所もありました。

町消防団員は、普段から川の出水時に危ない場所、一人暮らし老人世帯等を把握しており、そういった家を一軒一軒訪問して強く避難を促しました。ある一人暮らし老人の家では、消防団員の真夜中の見回りの声で起こされ、裏の土手を這い上がって避難し、その後あっという間に家が二階まで水に浸かり、命拾いしたそうです。

上矢作町という小規模町村の、一軒一軒を熟知している消防団だからこそできたことではあると思いますが、いざ災害となれば、通信機器などのハイテクよりやはり最も頼りになるのは生身の人間の力であることを痛感しました。

上矢作町のような山間地では、県外からの災害ボランティアを受け入れた経験がなく、地元抵抗なく受け入れてもらうためには、やはり役場を介することが必要です。また災害ボランティアと称して勝手に民家に入り込み、家の物を盗んでいく者も他の災害ではあったため、これを防ぐためにもこうしたルールは必要です。

災害ボランティアで一番感銘を受けたのは、はるばる東京から土日にバスでやってきた国際学生ボランティア協会の大学生達です。細い体の女子学生がジャージ姿で泥まみれになって民家の泥出しに励む姿は、地元の被災者の方にとって体力的な助けだけではない、精神的に大きな励ましになったようです。

災害復旧一周年式典で、ある被災住民の方が涙ながらに次のような発表をされ、会場の誰もが深い感銘を受けていました。「私の家は夫婦で小さな雑貨店をやっていたが、1階全部が泥に浸かり、私も高齢でもう店を捨てて息子夫婦のいる町外へ移ろうと最初は思った。しかし東京から来た学生ボランティアの子が何のゆかりもない私の家の泥出しに作業に黙々と励むのを見て、自分が恥ずかしくなり、もう一度店を再建しよう、頑張ってみようという気持ちになった」〈注:長文につき抜粋しています〉